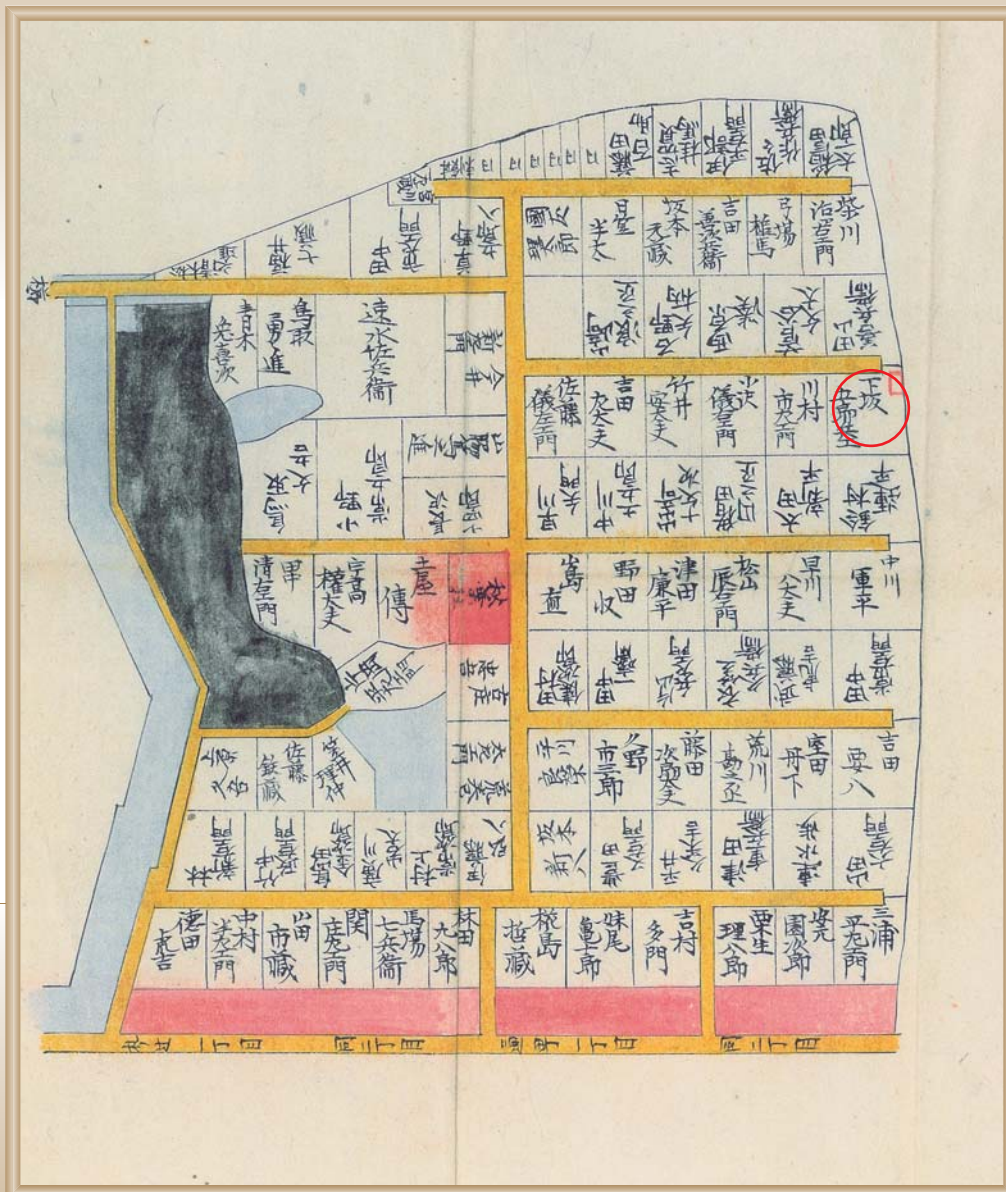


櫛原侍屋敷遺跡

—第18次発掘調査報告—



平成25年(2013)10月

久留米市教育委員会

序

久留米市は、筑後平野の中心に位置し、耳納山地の緑、筑後川の水など豊かな自然に恵まれています。このような恵まれた環境のもと、先人達は多くの文化を創造し、市内には貴重な歴史遺産が数多く残されています。

今回調査を実施した櫛原侍屋敷遺跡は、元和7（1621）年に有馬豊氏が丹波福知山より久留米に移った際に入城した、久留米城の造営に際して整備されたもので、現在の久留米市中心部の形成に繋がるものです。今回は、久留米城東部に整備された櫛原侍屋敷遺跡の北東端にあたる部分を調査し、多くの成果を得ることができました。今回の発掘調査によって、久留米の歴史解明、さらには文化財保護思想の理解や普及に多少なりとも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして多大なご理解のもとにご協力を頂きました、有限会社ユズ・コーポレーション代表取締役の白鳥頼敏氏や関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成25年10月31日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は倉庫建設に先立ち、平成24年度に有限会社ユズ・コーポレーション代表取締役白鳥頼敏氏の委託を受けて実施した、櫛原侍屋敷遺跡第18次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の神保公久が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、神保・江頭俊介・西拓巳・田中樹子・櫛原初美・藤木幸子・渡辺しげ子が行った。また本書に掲載した遺物実測、図面の浄書は、神保と専任非常勤職員の米澤美詠子が行った。
4. 遺構写真は神保・江頭が撮影した。また、遺物写真撮影は、久留米市埋蔵文化財センターにおいて塚本映子が行った。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を基に作成し、図面の方位は全て座標北を示す。
6. 本書に使用した遺構の略記号は、SDー溝、SKー土坑を示す。
7. 本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
8. 本調査の略記号はLKKー018、調査番号は201242である。
9. 表紙は安政二年舊廓圖、○は調査地付近の下坂家を示す。
10. 本書の執筆・編集は神保が行った。

本文目次

I. はじめに	1
II. 櫛原侍屋敷遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	3
IV. 総括	13

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、倉庫建設に伴う事前の発掘調査である。平成24年12月20日、有限会社ユズ・コーポレーション代表取締役白鳥頼敏氏から、久留米市櫛原町125-1における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の遺跡である櫛原侍屋敷遺跡に含まれており、平成7年度には西側隣接地において第1次調査が、東側隣接地では平成15年度に第5次調査が実施されている。さらに久留米城に関する絵図によると、照会地は櫛原侍屋敷の北東部付近の東端、安政二年舊廓圖や天保年間図などによると、下坂家にあたるものと想定された。以上のような経過から、発掘調査が必要である旨を回答し、その後の協議の結果、調査費用を原因者負担として発掘調査を実施する運びとなった。平成24年12月28日に「発掘調査の依頼」が提出されたのを受け、文化財保護法による諸手続きを済ませた後、平成25年1月9日に有限会社ユズ・コーポレーション代表取締役白鳥頼敏氏と久留米市長榑原利則は「櫛原侍屋敷遺跡第18次調査埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わした。現地の調査は平成25年1月15日から1月31日、報告書作成の委託契約期間は4月17日から同年10月31日である。

2. 調査の体制（平成25年度一報告書作成分）

調査委託：株式会社ユズ・コーポレーション（代表取締役 白鳥頼敏）

調査主体：久留米市教育委員会 教 育 長：堤 正則

調査総括：市民文化部 部 長：野田秀樹 担当次長：佐藤光義

文化財保護課 課 長：園井正隆

課長補佐兼課主査：宮崎俊一 白木 守

事務主査：塚本映子

庶務担当：豊福早苗

調査担当：神保公久 整理担当：米澤美詠子

発掘調査整理臨時職員：豊福浩子

Ⅱ．櫛原侍屋敷遺跡の立地と環境

久留米市は九州最大の河川・筑後川により形成された筑紫平野の中央部分に位置し、地理的な要因からも九州における交通の要衝として発展してきた。市街地の東方には耳納連山が位置し、その西端に延喜式内社である高良大社が鎮座する高良山（312.3m）が聳える。

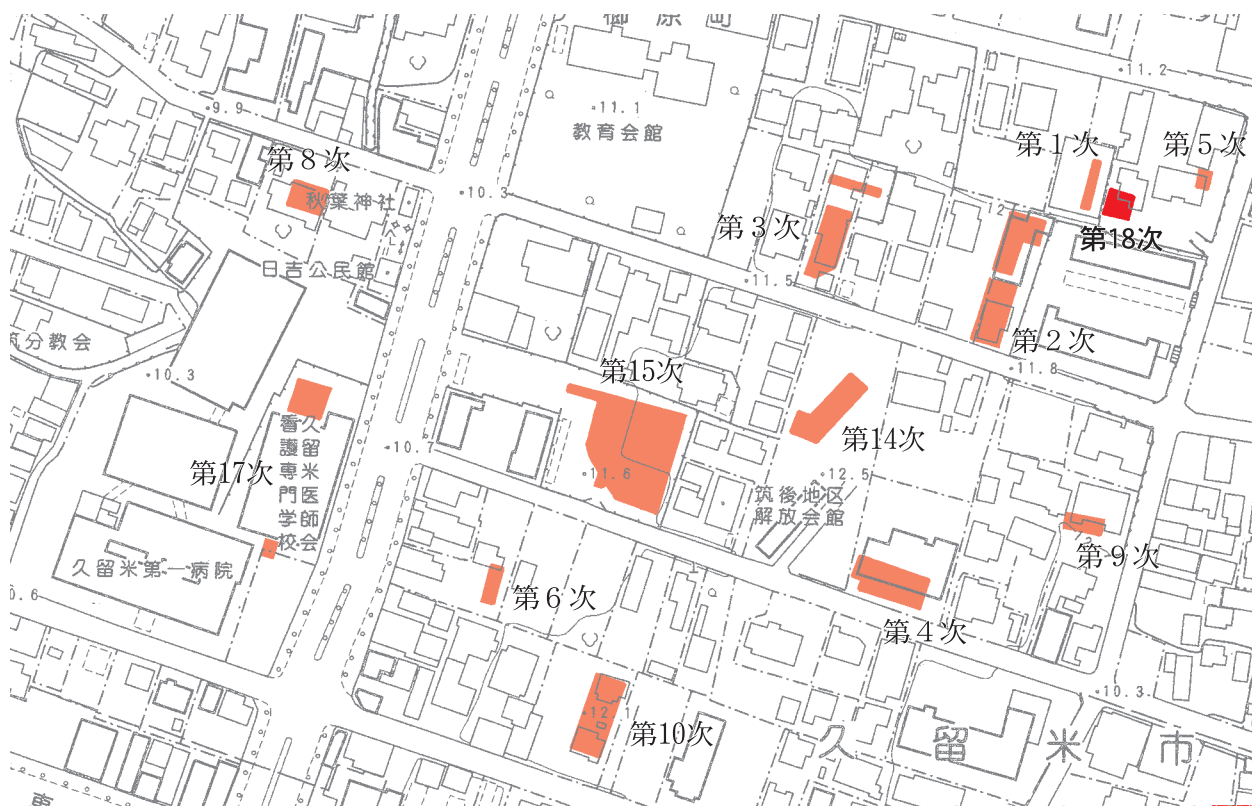
久留米城は久留米市街地の北西部に位置し、その本丸は筑後川左岸の標高10～13mを測る低台地上に立地する。城郭は、久留米城の本丸・二の丸・三の丸を東～南にかけて取り巻くように形成した連郭式城郭で、これまで多くの発掘調査が実施されている。また、久留米城関連の調査では、弥生時代や古墳時代、奈良・平安時代にかけての遺構・遺物が出土することがあり、櫛原侍屋敷第14次調査では、奈良時代の竪穴建物が検出されている。しかし、久留米城と城下町の形成時には、相当な地形の改変が行われたものと想定され、古代以前の様相については不明な点が多い。

櫛原侍屋敷は、久留米城の東側に形成された中級武士の居住地で、これまでに17次に及ぶ調査が実施されている。これらの調査では、櫛原侍屋敷の屋敷境を中心に、当時の生活を垣間見る多くの成果が得られており、現在では失われてしまった近世久留米城の景観を復元する貴重な情報となっ



第1図 櫛原侍屋敷遺跡の位置と周辺の遺跡分布図（1/25,000）

1. 櫛原侍屋敷遺跡第18次調査地
2. 久留米城本丸跡
3. 久留米城二ノ丸跡
4. 久留米城三ノ丸跡
5. 久留米城外郭遺跡
6. 明善高校校庭遺跡
7. 梅林寺川底遺跡
8. 日輪寺古墳
9. 大石村館跡
10. 速水遺跡
11. 大隈村館跡
12. 東櫛原今寺遺跡
13. 石丸遺跡
14. 辻遺跡



第2図 調査地点の位置と周辺地形 (1/2,500)

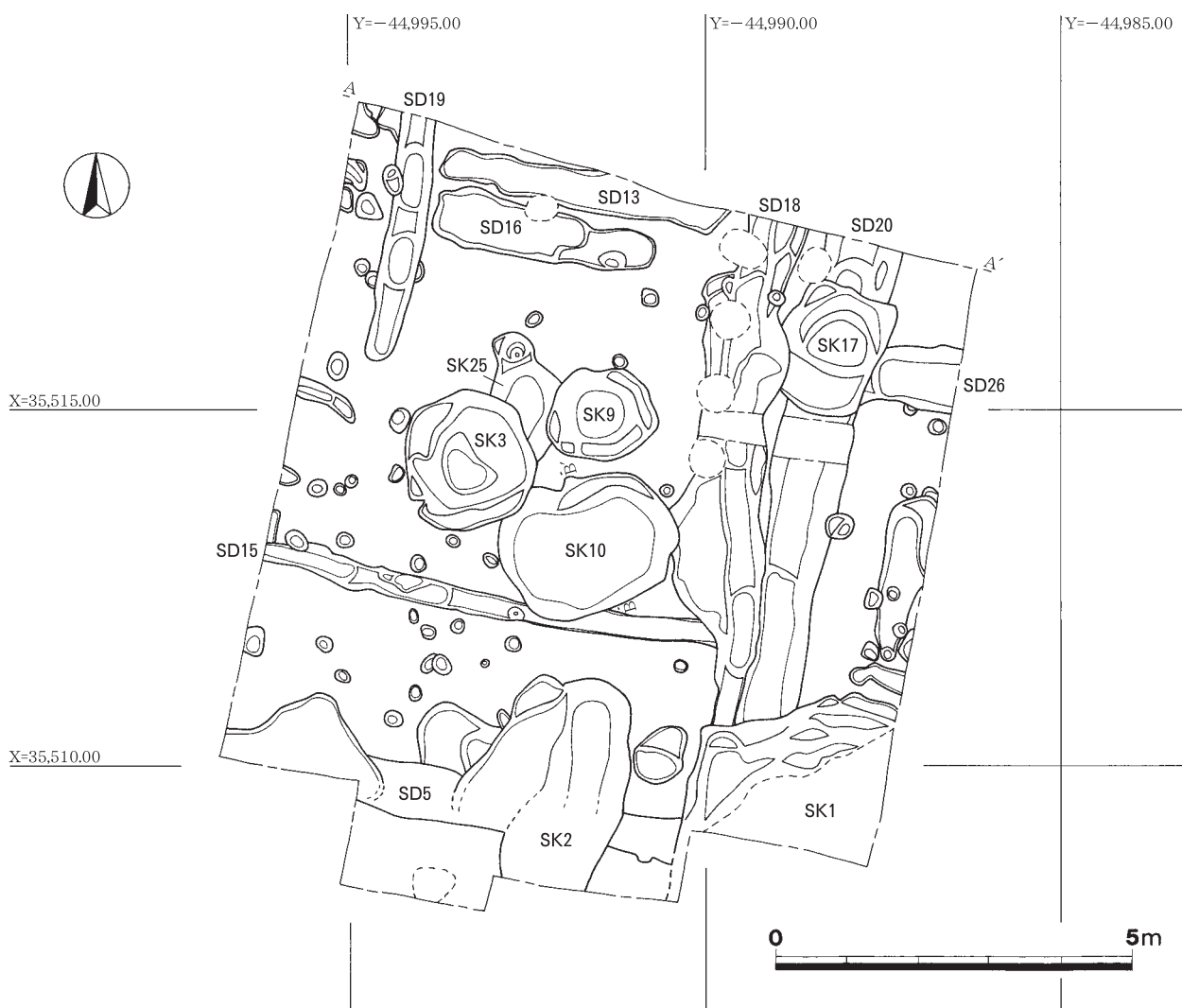
ている。また、北方約150mで実施された第16次調査では弥生時代中期の甕棺墓4基が検出され、西方に位置する久留米城外郭遺跡や京隈侍屋敷遺跡、東方の石丸遺跡等と並び、甕棺墓域が筑後川に面した段丘北端部に形成されていたことが判明している。

Ⅲ. 調査の記録

1. 調査の経過

櫛原侍屋敷遺跡第18次調査は、久留米市櫛原町125-1において実施した倉庫建設に先立つ事前の発掘調査である。前述したように対象地は久留米城の東側に広がる櫛原侍屋敷遺跡に含まれ、周辺における調査の結果を見ても遺構の存在が確実視された。今回は遺構の保存が困難な倉庫建設予定地部分を対象に、発掘調査を実施した。

平成25年1月15日に重機により表土除去を実施した。同日より遺構検出を開始し、並行して平板測量による略図作成を行った。その後、終了した場所から遺構掘下げを実施した。遺構面は削平や攪乱を受けていたものの、比較的多くの遺構を検出することができた。遺構実測はトータルステーションを用いて行い、そのデータはCUBIC社製ソフト「遺構くん Cubic」にて編集・保存している。全景写真はスカイマスターにより1月31日に撮影し、調査区南側の補足調査を行いながら、1月31日に重機により調査区を埋め戻し、現地調査を終了することができた。整理作業は5月1日から10月31日まで筑後国府跡発掘調査事務所にて実施した。



第3図 櫛原侍屋敷遺跡第18次調査遺構配置図 (1/100)

2. 検出遺構

本調査地周辺の地形は北から南へ向かって若干傾斜しており、元来は侍屋敷から続く宅地であった。基本土層は、真砂土や暗褐色砂質土によって形成された表土が約0.2～0.3m程度確認でき、その下層に粘質ブロック土を含む整地層や遺構埋土が認められた。遺構検出面は削平・攪乱を受けているものの残存状況は良好であり、多くの遺構が検出された。遺構検出面までの深さは約0.4mである。以下、主要遺構の概要を述べる。

溝

SD5

調査区南壁沿いで検出した東西走行の溝である。検出当初は土坑と考えていたが、埋戻し時の拡張による補足調査によって溝と判明した。後述するが、方位や掘方形状などから南側の屋敷地との境界溝と考えられる。約6.5m分を検出した。上端幅約0.5～0.8m、深さは調査区壁際であったために最下層まで掘り進めることができなかったが、約0.6m以上であることが確認できている。埋土からは、近世陶磁器や土師器・須恵器が少量出土している。



第4図 櫛原侍屋敷遺跡第18次調査区全景（北上空から）

SD13（第5図）

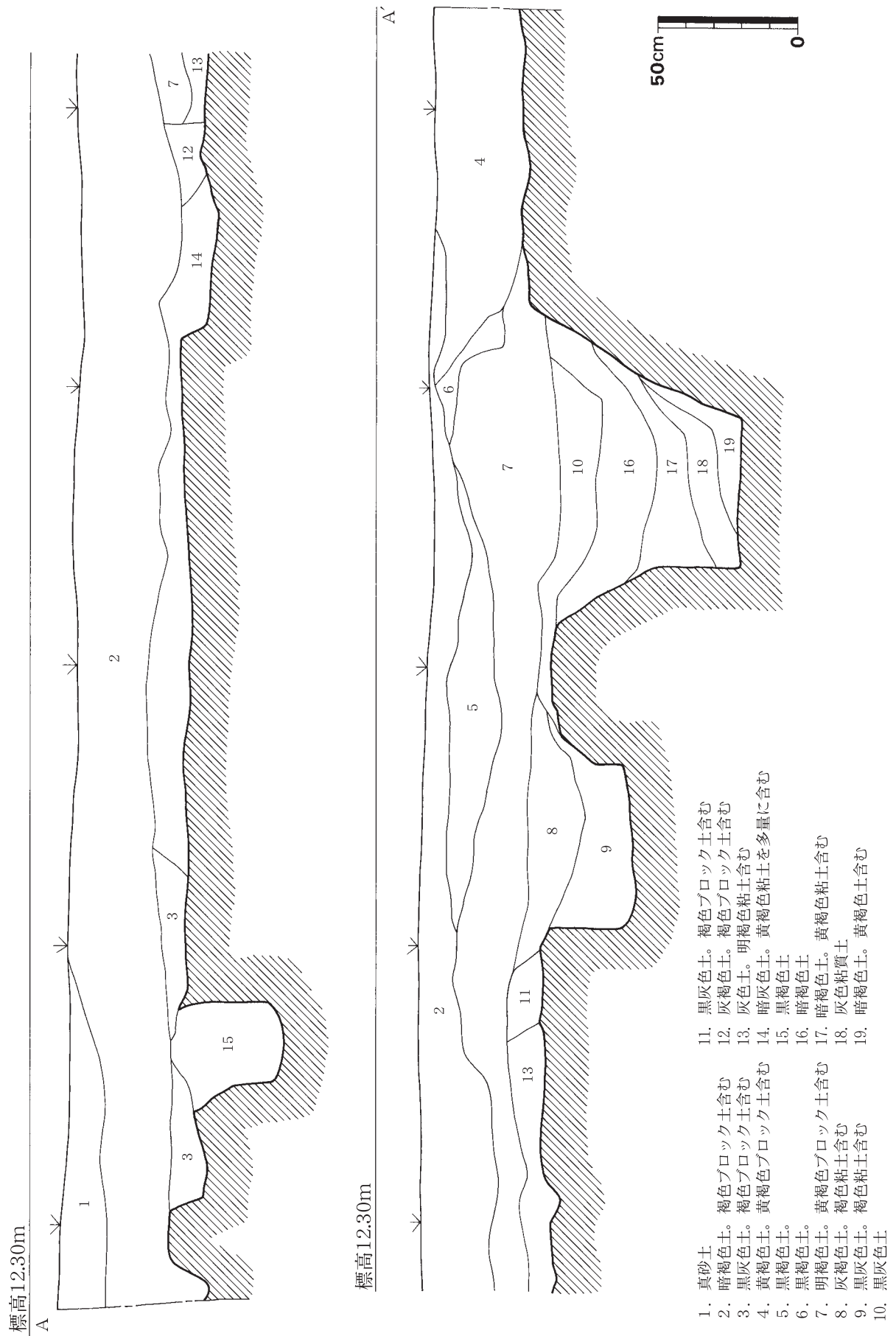
調査区北壁沿いで検出した。後述するSD16と並走する東西溝である。上端幅0.5～0.8m、深さ約0.15mと浅く、約3.1m分を検出したのみである。埋土からは近世磁器、土師器が少量出土している。

SD15

調査区の南よりで検出した東西走行の溝である。調査区西壁から約6.5m分を検出し、重複関係からSD18、SK10に先行することが判明している。西へ向かうほど深く、最深部では約0.3mを測る。上端幅約0.3m、底面幅約0.2mで、埋土からは土師器、近世陶磁器が少量出土している。



第5図 SD13・16全景（西から）



第6図 調査区北壁土層断面図 (1/20)

SD16 (第5図)

前述したSD13の南側で検出した東西溝である。上端幅0.4～0.6m、深さ約0.1mと浅い。埋土は明褐色粘土を含む灰色土で、近世陶磁器、砥石、瓦などが出土している。

SD18 (第6・7図)

調査区の東部分で検出した南北走行の溝である。後述するSD20と並走するが、南部分は重複し、SD20に後出することが確認できている。南北約7.5m分を検出したが、南部分はSK1に破壊を受けている。上端幅0.45～0.6m、底面幅約0.3m、深さ約0.3～0.4mと比較的深い。埋土からは近世陶磁器、砥石、瓦などが出土している。



第7図 SD18・20・26全景（北から）

SD19 (第6・8図)

調査区北西部で検出した南北走行の溝である。調査区北壁から約3.5m分を検出した。上端幅約0.4m底面幅約0.25m、深さ約0.4mである。埋土は黄褐色粘土を含む黒褐色土で、土師器（古代・近世）、近世陶磁器、瓦質土器、瓦などが出土している。



第8図 SD19全景（南から）

SD20 (第6・7図)

前述したSD18の東側で検出した南北走行の溝である。SD18に先行する。後出する遺構に先行するため残存状況が悪いが、上端幅約1.0m、底面幅約0.5m、深さ約0.6mを測る。土層観察の結果、東側より人為的に埋め戻されたものと判断される。埋土からは土師器、須恵器、近世陶磁器、瓦等が出土しているが、下層には近世

の遺物が認められないため、8世紀末～9世紀初頭頃の所産と考えられる。

SD26 (第7図)

前述したSD20と直交して検出した東西走行の溝である。SD20に後出し、SD18に先行するものと思われる。上端幅約0.9m、底面幅約0.5m、深さ約0.8mを測る。埋土からは土師器、須恵器、近世陶磁器、青銅製品、瓦が出土している。18世紀の所産と考えられる。

土坑

SK1

調査区南東隅で検出した。一部を検出したのみで詳細は不明であるが、出土遺物より近代以降の

所産と考えられる。南北長約3.5m、東西長約2.7m分を検出し、深さは底面まで掘り下げていないために不明である。埋土からは、土師器、須恵器、近世陶磁器、ガラス瓶、土製品、瓦、鉛玉などが出土している。

SK 3

調査区中央部の西よりで検出した。平面形は円形を呈し、直径は約1.8mを測る。中心部に向かって徐々に深くなり、最深部では約0.15mを測る。埋土からは、土師器、須恵器、近世陶器、瓦などが少量出土している。

SK 9 (第9図)

前述したSK 3の北東部に隣接して検出した。平面形は不整形を呈し、長軸長約1.5m、短軸長約1.2mを測る。底面は直径約0.7mの円形を呈し、深さは約0.35mを測る。埋土からは、土師器、近世陶磁器、ガラス瓶、貝殻、瓦などが出土しているため、近代以降の所産と考えられる。

SK 10 (第10・11図)

SK 3の南東部で検出した。重複関係よりSK 3に先行する。平面形は長軸長約2.5m、短軸長約1.8mを測る不整形を呈する。底面はほぼ平坦で、深さは約0.3mを測る。埋土は上面に焼土・炭化物を大量に含んでおり、

中・下層はブロック土を含んでいたことから、人為的な埋め戻しと判断される。土師器、須恵器、近世陶磁器、不明鉄製品、瓦などが出土している。

SK 17

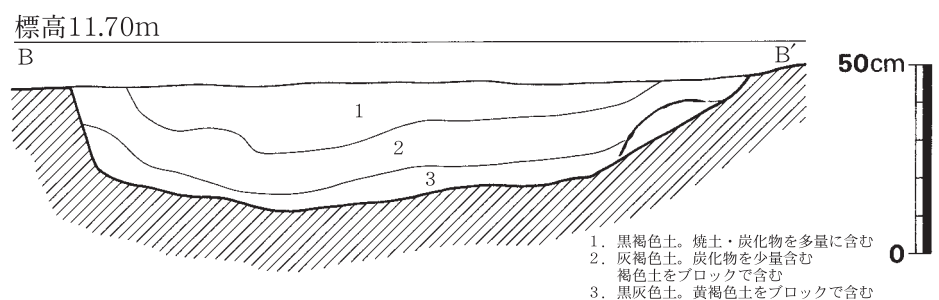
調査区北東部でSD 18・20・26と重複して検出した。重複関係よりSD 18に先行し、SD 20・26に後出する。平面形は長方形を呈し、長辺長約1.8m、短軸長約1.3mを測る。底面は中央部へ向かっ



第9図 SK 9全景（北から）



第10図 SK 10全景（西から）



第11図 SK 10土層断面図 (1/20)

て深くなり、最深部では約0.3mを測る。埋土からは、土師器、須恵器、瓦質土器、近世陶磁器、砥石などが出土している。19世紀代の所産と考えられる。

S K 25 (第12図)

調査区中央部の北よりで検出した。重複関係からS K 3・9に先行する。平面形は南北に長い楕円形を呈し、長軸長約1.6m、短軸長約1.0mを測る。底面は徐々に深くなり、最深部では約0.3mを測る。埋土からは、近世陶器碗の細片2点が出土しているのみである。



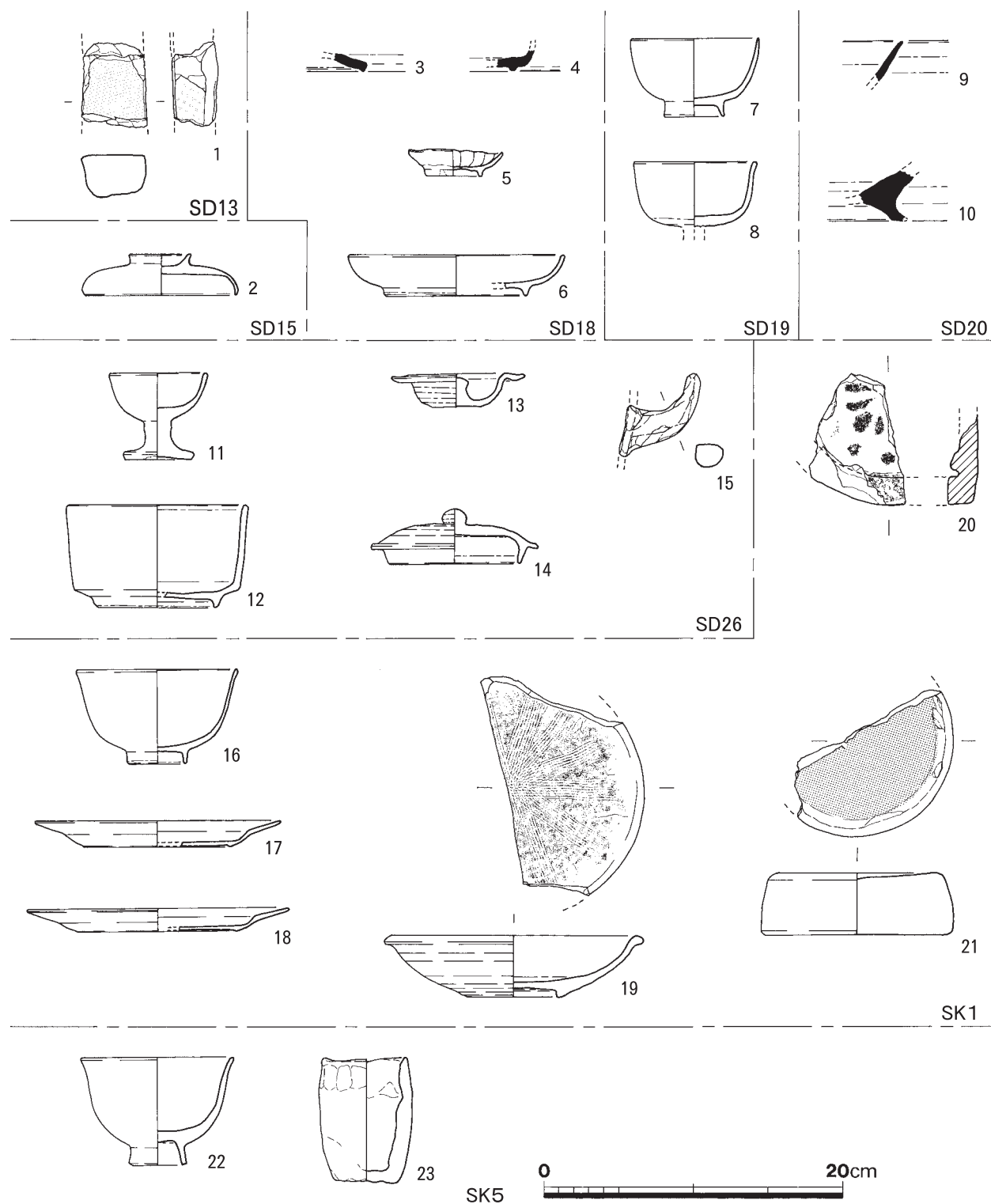
第12図 S K 25全景（南から）

3. 出土遺物

今回の調査では、溝や土坑を多く検出することができ、各遺構からは大量の遺物が出土している。主に近世の所産であるが、S D 20を中心に古代の遺構も出土しており、8世紀後半～9世紀前半の遺物が各遺構に混入して少なからず出土している。全体の遺物出土量はパンコンテナーにして3箱程度である。種別は土師器、須恵器の他、瓦質土器、近世陶磁器、瓦、石製品、鉄製品、ガラス製品などがある。遺物についての詳細は、第1表を参照していただきたい。



第13図 出土遺物（写真①）



第14図 榊原侍屋敷遺跡第18次調査出土遺物実測図 (1/4)

【遺物観察表凡例】

口径（長）・底径（幅）・器高（厚）の単位はcmである。（ ）内の数値は現存または復元値を示す。

色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1997年版）による。

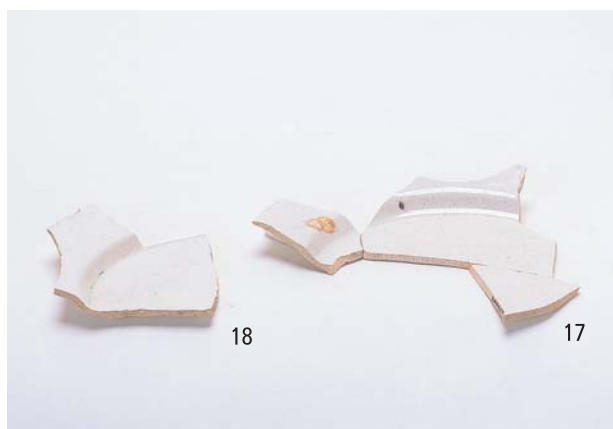
登録番号は、久留米市市民文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。

第1表 櫛原侍屋敷遺跡第18次調査出土遺物観察表

遺物No	出土遺構	種 別	器 形	法 量			色 調		調整・文様		胎土・釉薬	備 考	遺物登録 番 号
				口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面	外面	内面			
1 第14図	SD13	石製品	砥石	(5.6)	(4.4)	(2.4)	灰白						201242 000011
2 第14図	SD15	磁器	蓋	(10.2)	(4.2)	2.8	灰白	灰白	樹木 岩	四方罽・圓線 環状松竹梅	ほぼ精良・灰白 染付	「太明年製」の銘 18C 広東碗蓋	201242 000012
3 第14図	SD18	須恵器	蓋	—	—	(1.2)	褐灰 灰 にぶい黄橙	灰	回転ナデ	回転ナデ	精良		201242 000017
4 第14図	SD18	須恵器	坏	—	—	(1.4)	灰	灰	回転ナデ	回転ナデ	ほぼ精良		201242 000016
5 第14図	SD18	磁器	小皿	6.4	3.8	1.7	灰白	灰白	—	—	精良 白磁	紅皿	201242 000019
6 第14図	SD18	磁器	皿	(14.6)	(9.6)	2.7	灰白	灰白	圓線	圓線・唐草	精良 染付	口鍔	201242 000018
7 第14図	SD19	磁器	碗	8.7	4.1	5.2	灰白	灰白	—	—	精良 白磁		201242 000020
8 第14図	SD19	磁器	仏飯具	8.3	—	(4.4)	灰白	灰白	折枝梅・圓線	—	ほぼ精良 染付		201242 000021
9 第14図	SD20	須恵器	坏	—	—	(2.7)	灰白 灰黄	灰白	回転ナデ	回転ナデ	ほぼ精良		201242 000022
10 第14図	SD20	須恵器	壺	—	—	(3.5)	灰黄褐 灰黄 黄灰	灰白	回転ナデ	回転ナデ	少量の黒色粒子含む	外面に自然釉	201242 000023
11 第14図	SD26	磁器	仏飯具	(6.6)	4.5	5.8～ 5.9	灰白	灰白	菊花散らし	—	精良 染付	内外面に釉垂れ	201242 000026
12 第14図	SD26	磁器	碗	(12.2)	8.2	7.0	灰白	灰白	牡丹唐草 圓線	回転ナデ	ほぼ精良 染付	口禿 1720～40年代 元禄様式	201242 000025
13 第14図	SD26	陶器	蓋	9.0	—	2.3	にぶい橙 浅黄橙 赤褐	オリーブ褐 黒褐 白	—	糸切り	ほぼ精良		201242 000028
14 第14図	SD26	陶器	蓋	(8.9)	—	3.7	灰黄褐	橙 にぶい橙	—	回転ナデ	少量の砂粒（長石・ 石英など）含む 3mm大の石粒など		201242 000024
15 第14図	SD26	土師器	把手	—	—	(5.6)	にぶい橙～ にぶい褐 にぶい黄橙 黒	灰	ナデ	ナデ	少量の赤色粒子含む		201242 000029
16 第14図	SK1	磁器	碗	(10.9)	(4.1)	6.3	灰白	灰白	松	雷 環状松竹梅	精良 染付		201242 000003
17 第14図	SK1	陶器	皿	(16.6)	(9.9)	1.8	灰白	灰白	—	—	黒色粒子含む	「日本硬質陶器」 の銘	201242 000004
18 第14図	SK1	陶器	皿	(17.6)	(10.7)	1.6	灰白	灰白	—	—	ほぼ精良	内外面に貫入	201242 000006
19 第14図	SK1	陶器	おろし皿	(17.4)	(7.0)	4.1	にぶい黄 灰褐	にぶい黄	—	櫛目文	精良・にぶい黄	基筒底 8本単位の櫛目文 蛇の目釉剥ぎ	201242 000014
20 第14図	SK1	瓦	軒丸瓦	(6.1)	(5.2)	(1.8)	灰		型押し ナデ	—	精良	蓮弁+連珠文	201242 000001
21 第14図	SK1	土製品	トチン	(12.0)	(12.9)	4.2	にぶい橙 灰褐 浅黄橙		ナデ	—	多量の石粒（長石・ 石英など）含む 5mm大の石英など	天井部被熱	201242 000013
22 第14図	SK5	陶器	碗	(10.3)	(3.9)	7.2	暗オリーブ灰 オリーブ灰～ 灰白		—	—	精良		201242 000010
23 第14図	SK5	土師器	焼塩壺	5.8	4.1	8.4	橙	橙	ナデ	ナデ	石粒、礫（長石・石英 など）含む 11mm大、8mm大、3mm大の礫など	外面口縁部に 指押さえ	201242 000009
24 第16図	SK2	土製品	飾道具	(16.0)	12.8	2.7	灰白	灰白	型押し	ナデ	精良	目釘3ヶ所 内面朱塗り	201242 000008



第15図 出土遺物（写真②）



第16図 出土遺物 (写真③)

IV. 総 括

今回の調査地は、久留米城の東側に設けられた櫛原侍屋敷の北東端付近に位置する。調査の目的は、武家屋敷の区画や屋敷内の様子を把握することにあった。調査では、調査区南端において屋敷の区画を示す可能性のある東西溝を検出し、他に土坑・溝などを検出することができた。さらに古代に遡る遺構も検出することができている。ここでは今回の調査で得られた所見を述べておきたい。

●古代の遺構について

櫛原侍屋敷遺跡における一連の調査では、近世、近現代の遺構と共に、原始・古代に遡る遺構が少なからず検出されている。第4次調査のS K 36、第9次調査のS P 3・4、第14次調査のS I 10、S K 20・230、ピット10基などが検出されており、土師器・須恵器の出土や、埋土の状況などから古墳～奈良・平安時代の遺構とされ、第5次調査の際に行われた試掘調査でも奈良時代の遺構が確認されている。今回の調査では、S D 20が8世紀末～9世紀初頭頃の所産と判断され、他にピット4基ほどがその可能性がある。古代の当地の景観は、侍屋敷造成時の大幅な地形改変によりほぼ失われているものと思われるが、南東約100mに位置する第14次調査や東隣接地の第5次調査、そして本調査区と、櫛原侍屋敷北東部付近に、古代の遺構が比較的まとまった状況を呈する。地形改変がさほど行われていない可能性もあるが、本調査区周辺に集落が広がっていたことを示すものと思われる。

●下坂家について

久留米城に関する江戸期の絵図は、現在数種類伝わっているが、代表的な絵図として1680年の延寶八年図と天保年間図（1830～1844年）がある。他に安政二年舊廓圖（1855年）などがあるが、これらの絵図によると、調査地付近は下坂家にあたるものと思われる。下坂家は、有馬家が筑後国北半部の領主として入封する以前、筑後国主田中吉政に下坂孫九郎が二百石で召し抱えられており、田中家改易後には下坂権之丞が、有馬豊氏に馬廻組二百石で召し抱えられている。また、享和三年（1803）に没した下坂才蔵重義以降、良移心当流の柔術師範の家系である。また、その孫にあたる下坂始は、旧久留米藩士の福島県安積郡原野開拓の際に、その総括として尽力した人物である。

●硬質陶器について

本調査で出土した遺物の中に、第14図17（201242000004）、18（201242000006）として報告した陶器皿がある。17の見込みには印影が押され「DOUBLE PHOENIX」と言われるシンボルマークの下に「NIPPON □OSHITSU TOKI C□」改行して「J A P A N」の文字が見える。これは、1908（明治41）年に設立された日本硬質陶器株式会社の製品であることを示す。日本硬質陶器株式会社は石川県の旧前田公爵家を主な出資者として開業されたもので、現在でもN I K K Oとして操業中である。なお、硬質陶器は17世紀頃にイギリスで開発された西洋陶器の一種である。

報告書抄録

ふりがな	くしはらさむらいやしきいせき		
書名	櫛原侍屋敷遺跡－第18次発掘調査報告－		
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書		
シリーズ番号	第338集		
編著者名	神保公久(編)・米澤美詠子		
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課		
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番地 3 TEL 0942-30-9225 FAX 0942-30-9715 Email : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp		
発行年月日	平成25年(2013)10月31日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯 。 ’ 〃	東経 。 ’ 〃	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くしはらさむらいやしきいせき 櫛原侍屋敷遺跡 だい 18 し ちょう さ 第 18 次 調 査	く る め し 久留米市 くしはらまち 櫛原町125-1	40203	—	33° 19′ 10〃	130° 31′ 00〃	20130115 ～ 20130131	87㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
櫛原侍屋敷遺跡 第 18 次 調 査	集落	奈良～平安	溝	1 条	土師器、須恵器		櫛原侍屋敷遺跡の北東端 付近を調査した。二百石 取りの下坂家にあたる。 屋敷境の可能性のある溝 や 8 世紀後半～ 9 世紀前 半の溝を検出した。	
		近世～現代	溝 土坑	8 条 6 基	土師器、瓦質土器、近 世陶磁器、瓦、石製品、 鉄製品、ガラス製品			
要 約								
久留米城の東側に広がる櫛原侍屋敷の北東部を調査した。対象地は安政二年舊廓圖（1855年）によれば、下坂八右工門と見え、馬廻組二百石の下坂家の屋敷地にあたるものと思われる。調査では、溝や土坑を検出した。中でも東西溝 S D 5 は、南側に位置する鈴村家との屋敷境を示す可能性がある。また、8 世紀後半～ 9 世紀前半の南北溝 S D 20 や、古代に属するピットも検出することができている。中世以前の遺構群は、侍屋敷造営時に地形が大幅に改変されて失われてしまったと思われるが、周囲の調査成果と合わせると、本調査区付近に当該期の集落が広がっていた可能性が高い。								
土木工事の届出日		平成25年 1 月 4 日			遺物の発見通知日		平成25年 2 月 5 日 (24文財第1271号)	

櫛原侍屋敷遺跡

－第18次発掘調査報告－

久留米市文化財調査報告書 第338集

平成25年10月31日

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

印刷 香和印刷株式会社